

介護老人保健施設しおさい

症 例 概 要 利用者氏名：H・M様（70代後半 女性 要介護2）
利用期間：令和2年2月下旬～現在
既往歴：脳性麻痺・認知症

経過：幼少期に脳性麻痺となり知的面・運動機能面に障がいを抱える。数年前から、ご家族の病気により自宅での生活が難しくなり、ショートステイの利用を経て、当施設に入所される。こだわりが強く、ご自身の生活スタイル以外は受け入れられない性格で、行事や体操への参加は拒否、積極的な他者交流は少ない状態であった。本人の生活スタイルを崩さない関りを続けた結果、生き活きとした表情や発言が多くみられるようになった一例について報告する。

内 容

介護者であるご家族の健康上の理由で在宅生活困難となり入所されたH・Mさんは、当初、他人との関りをもととされず、頑なにご自分の決めた時間割に従って単独行動をされていました。スタッフからの日課の誘導を大声で拒否され、独語を発しながら車椅子でフロアーを周回している姿が見られていました。ADLは車椅子レベルで一般的に1人で行われていましたが、立位での動作の安全性などは確認させていただけなかった状態でした。リハビリスタッフによる訓練の声かけにも「夜じゃないと絶対やんない」の1点張りで、動作練習や体操、レクリエーションへの参加など様々な提案を一切受け付けていただけませんでした。

元々、こだわりが強い性格で、同居していたお兄様の助言でさえも聞き入れなかったとの情報から、リハビリスタッフはご本人の生活スタイルを崩さない時間帯での関りを模索し、できるだけ遅い時間を提示しながら声かけを続けました。初回介入から1週間後「17時はやるよ。夜だから」、10日後「16時35分ならええよ。もう夜だから体操もやる」と、その時間に限り個別訓練を行うようになりました。リハビリに一生懸命に取り組まれる姿を見ていた介護職員からの激励や賞賛を受けるなど、徐々に他者との交流機会が増えていきました。同時に、毎週発売日を楽しみにされている雑誌が必ず手に入るように援助したり、ご本人の生活ペースを崩さないように関りを持ち続けました。その結果、大きな声を出す、挨拶や声かけに対して逐一拒否的にふるまうなどの課題にも、ご本人から周りに歩み寄るような対人関係の変化が見られてきました。

現在、ADLは車椅子レベルで、立位でのふらつきや座るときの性急性などに対し、より安全な動作が獲得できるよう個別訓練を継続しています。ご本人のこだわる日々の生活ぶりに大きな変化は無いものの、親しく会話するご利用者仲間もでき、職員に対してもうちとけた口調で話しかけてくるなどの交流が増えてきました。16時35分になると「(リハビリの) 時間だからいいよ～」とリハビリスタッフへ元気な声で呼びかけてくださいます。

入所当時、住み慣れた家庭からの環境の激変に適応できず、周囲から孤立して廊下にポツンとお一人ですごされていたH・Mさんですが、今ではもう一つの生活の場になじんで、表情も穏やかに言葉のキャッチボールを交わす新しい人間関係をはぐくんでおられる笑顔のH・Mさんがいらっしゃいます。

H・Mさんとのこれまでの関りを通じて、わたくしたちは医療・福祉従事者として、障がいを理解し人となりを把握し、何よりも施設や集団の生活スタイルの枠組みにはめ込もうとせず、その人らしさを活かすという関わりの大切さを改めて学ぶことができました。